桶 西中だより

県下に誇れる西中を

学校教育目標　志を持ち　自ら学ぶ　健康でたくましい生徒

桶川市立桶川西中学校
令和５年　１月２４日
第１２号

私は…

養護教諭　関谷　多美子

私は中学生のころ、養護教諭になりたいと思っていました。当時、養護教諭の養成課程のある大学は近隣になく、千葉県まで行かなければなりませんでした。中学３年の時、新任の養護教諭の方が着任し、埼玉県が県立で「教員養成所」という２年間で免許が取得できる専修学校をもっていることを教えてくれました。しかも授業料は０円、高卒資格さえあれば受験できました。「ここに行こう」、そう決めて高校は普通科に進みました。

高校生になって周囲の友人の刺激を受け、４年制の大学に行きたくなりました。大学に行って勉強したいものは近代日本文学。中学生の時とは大きく変化しました。

そのうちアニメオタクの友人とともに声優の魅力に取りつかれていきます。

絵画やアニメは好きですが、自分で作品を作り出せるほどの力量は無いと最初からあきらめていました。しかし感情を伝えるように言葉を発することは努力すればどうにかなるかもしれない、と思っていたのです。

けれども、そのころの声優さんは俳優さんたちで、演劇などやっていて声優の仕事のお話がきてやっている、という方たちでした。自分には遠い世界なのだと思いました。

そのうち私は、「自分は何ももっていない」という現実にぶち当たります。私は動植物が好きで友人たちよりも少しは知識がありましたが、それは微々たるものです。運動系は全くダメ、日本文学にしてもただ好きなだけでこれといって秀でたものではありません。

高校３年の時、なぜか私は芸術系の進学先を目指すクラスに入れられ、漫画の「ブルーピリオド」を間近で見ている感じでした。途中、海外に留学を決め卒業を１年遅らせた友人もいました。

結局、まわりまわって最初の「教員養成所に行って養護教諭になる」というところに戻ってきました。高校の友人たちが大学を卒業するころには自分はもう働いていました。

大学卒業を控えた友人たちに会うと「すごいよ」「差をつけられちゃったなぁ」なんて言われて、うれしく思ったことを覚えています。ちなみに家族は教員という職業に大反対で早くやめるように言われていました。

今、たくさんの可能性を秘めたエネルギー溢れる西中の皆さんを見て思うのは、やりたいことがあるなら、あきらめずに進んでいってほしいということです。私は今でも４年制の大学に行きたかったと思っているし、声優を目指してみたかったと思っているから。